

## 桜尾城と厳島神社神主家

はつかいちこうこう まえ はる さくら めいしよ こたか やま  
廿日市高校の前にたたずむ、春の桜の名所のひとつでしかないような小高い山。  
はつかいちしゅみん した いこ ばかつらこうえん な さくらおじょうし  
それが廿日市市民に親しまれている憩いの場桂公園、またの名桜尾城址です。  
きょうど しせき しょうちやう ば い す  
ここは郷土の史跡のシンボル(象徴)の場と言っても言い過ぎではありません。  
たいがん せかいいさん にほんさんけい みやじま ふか かんけい  
それは対岸の世界遺産・日本三景の宮島ととっても深い関係があるからです。

さくらおじょう え どじだい ひろしまはん へんさん げいはんつうし  
桜尾城はいつごろできたのか。江戸時代に広島藩で編纂された「芸藩通志」には  
さくらおじょう かまくらぼくふ ひら みなもとよりとも おとうとのりより しそん よしみ しきず  
桜尾城は鎌倉幕府を開いた源頼朝の弟範頼の子孫である吉見氏が築いたとある。  
いつくしまじんじやしゃでん そうけん すいこてんのうそくいがんねん さえきくらもと つた  
厳島神社社殿の創建は推古天皇即位元年(593)に佐伯鞍職によると伝えられる。  
へいし いせ くに ぶし ただもり こたいのらきよもり きゆうあん あき かみ にんかん  
平氏は伊勢の国の武士で、忠盛の子平清盛が久安二年(1146)安芸の守に任官し、  
いつくしまじんじや しんこう あき くに るすいやく さえきし いつくしまじんじや かんぬし  
厳島神社を信仰するようになり、安芸の国の留守役の佐伯氏が厳島神社の神主と  
さえきぐんし か へいし いつくしまじんじや かんけい ふか  
佐伯郡司を兼ねていたので、平氏と厳島神社の関係はより深くなっていった。  
かんぬし さえきかげひろ じだいらゆうせい きわ にんあん げんざい げんけい  
神主 佐伯影弘の時代隆盛を極め、仁安三年(1168年)現在のような原型ができ、  
へいけいちもん すうはい 、「いつくしまじんじや しやうん せいだい  
こうして平家一門の崇拜により、厳島神社の社運は盛大となっていった。  
おうじ いつくしまじんじやかんぬしき さえきし せしゆう  
往時より厳島神社神主職は、佐伯氏が世襲していたのです。

ぶんじ だんのうら かつせん へいけ めつぼう れきじょうおお へんかく  
文治元年(1185年)壇ノ浦の合戦で平家が滅亡したことは、歴史上大きな変革とな  
かんぬし さえきし せいりよく すいたい いつくしまじんじや じやうげん つづ じやうおう  
り、神主 佐伯氏の勢力も衰退し、厳島神社は承元元年(1207年)に続き、貞応二  
ねん かさいご あいだじんじや さいけん  
年(1223年)二度目の火災後は、12年もの間神社の再建ができなかった。  
かまくらぼくふ ごけにん すおう しゆごしき ふじわらちかざね かんぬしき ゆず ちか  
そこで鎌倉幕府の御家人で周防の守護職であった藤原親実<sup>ちか</sup>に神主職を譲り、親  
ざね かんぬしき じやうきゆう あきこくしゆごしき ぶんりやく か いつ  
実は神主職(承久三年(1221年)と安芸国守護職(文暦二年(1235年)を兼ね、厳  
しまじんじや さいけん ちかざね ご すおう しゆごしき かえ たけだし  
島神社は再建することができた。親実はその後、周防の守護職に帰り、武田氏が  
あきこくしゆごしき ふじわらちかざね しそん かんぬしき せしゆう じやうきゆう らん  
安芸国守護職になる。藤原親実の子孫は神主職を世襲し、承久の乱のあった  
じやうきゆう てんぶん ともだおきふじ さくらおじょう ひ  
承久三年(1221年)から天文十年(1541年)4月5日友田興藤が桜尾城に火をつけ  
じけつ おおうちよしたか ほろ ふじわらかんぬしけ めつぼう いつくしま  
自決し、大内義隆により亡びる。(藤原神主家の滅亡まで、三百十年ばかり厳島  
じんじや かんぬし しんりやうち しはい ほんきよ さくらおじょう お  
神社の神主としてまたその神領地の支配のため、その本拠を桜尾城に置いていた)。

かんぬしき さえきし ふじわらちかざね とつぜんか  
ところでなぜ神主職が佐伯氏から藤原親実に突然代わるようになったのか。  
じょうきゅう じょうきゅう らん あきほうめん ごうぞく きょうがた こと ぼじょうこう みかた  
承久三年(1221)の承久の乱で安芸方面の豪族で京方の後鳥羽上皇に味方し、  
ま ゆえ しょりょう ぼつしゅう かまくらぼくふ にんめい はい  
負けた故その所領が没収され、鎌倉幕府からあらたに任命されて入ってきた。  
さえきいちぞく なか きょうがた みかた つみ と かまくら こけ  
佐伯一族の中に京方に味方したものがあって、その罪に問われ、鎌倉の御家  
ひと ちかざね かんぬしき あた  
人である親実に神主職が与えられたのではないだろうか。  
さくらおじょう きよじょう だいいつぼ はじ  
こうして藤原氏神主家は、桜尾城を居城とした第一歩が始まったのです。  
じんじやさいし じつけん きゅうらい ち ごうぞく さえきしいちぞく けいしゅう  
しかし神社祭祀の実権は旧来からこの地の豪族である佐伯氏一族が継承する。

## はつかいち せんじょう か いつくしまかんぬし け あらそ 廿日市が戦場と仮した巖島神主家争い

### かんぬし あとめ あらそ 神主の跡目争い

おうにん らん むろまち ききょうと ぶたい しょこく だいまょう どうざいに は わか つづ  
応仁の乱(室町期京都を舞台とし諸国の大名が東西二派に別れての11年続いた  
ご ゆうりよくこじん しだい おおうち しせいりよくか はい  
内乱)後、有力国人も次第に大内氏勢力下に入るようになった。

こうしたなかで、めいおう かんれいほそかわまさもと しょうぐん ちい お  
こうしたなかで、明応二年(1493)に管領細川政元により將軍の地位を追われた  
あしかがよしね よしき よしただ よしたね かいめい めいおう おおうちし たよ すおう やまぐち  
足利義種(義材→義尹→義種と改名)が明応八年(1499)大内氏を頼って周防(山口)  
げこう おおうちよしおき じょうらく きかい うかが えいしゅう ほそかわまさもと  
へ下向した。大内義興は上洛の機会を伺い、永正四年(1507)六月細川政元が  
かしん ころ ほそかわしないぶ ぶんれつ ふか どうねん よしたね ほう  
家臣に殺され、細川氏内部の分裂が深まると、同年十一月義種を奉じて(たてまつ  
やまぐち しゅつぱつ よくごねんろくがつ あき こくじん ひき きょうと はい  
る)山口を出発し、翌五年六月安芸の国人のほとんどを率いて京都に入った。

この時の神主藤原興親は、もりし一族の長屋氏の出で神主家の養子となった  
のりちか こ あむねちか ほんけながやし そうぞく めいおうにねんいこうむねちか  
教親の子であるが、兄宗親が本家長屋氏を相続したため、明応二年以降宗親の  
かんぬし しゅうにん かな えいしゅう かきょうと びょうし  
あと神主に就任した。悲しいことに永正五年(1508)十二月八日京都において病死

してしまった。この興親の死が神主の跡目を巡る争いのドラマの始まりとなった。

おきちか し ご すいこう ともだおきふじ おがたかのかみ ざいきょう くにもと  
興親の死後、随行していた友田興藤、小方加賀守はそのまま在京したが、国元に  
のこ しんりょうしゅう ひがしがた にしがた ぶんれつ あらそ はじ  
残った神領衆が東方と西方に分裂して争いが始まった。

さくらおじょう た こ おきふじは ひがしがた いつかいち ししどじぶじょう くさつ はにし  
桜尾城に立て籠もった興藤派の東方は五日市の宍戸治部少輔らで、草津の羽仁氏、  
だいしやういんざす しょうけい こだまじぶじょう いつくしま す どうちゅうしゅう くわ  
大聖院座主、上卿、児玉治部丞ら巖島に住む「島中衆」らが加わっていた。

たい にしがた にいざとわかさのかみ ふじかけおじょう た こ こいじょう おおのこうちじょう  
対する西方は新里若狭守らが、藤掛尾城に立て籠もり、己斐城、大野河内城などが  
きよてん ひがし たけだ にし おおうち いしき かんぬし あとめあらそ すうねんかん およ  
拠点であった。東の武田、西の大内を意識した神主の跡目争いは数年間に及んだ。

すうねんかん およ とうざい わ しんりょうしゅう ぶんれつこうそう おおうちよしおき したが じょうらく  
数年間に及ぶ東西に分かれた神領衆の分裂抗争は、大内義興に従って上洛して  
いた武田元繁が義興から出された帰国許可により、様相が一変する。  
きこく さい よしおき きょうと くげ あすかいし むすめ じぶん ようじょ うえ もとしげ つま  
帰国に際し、義興は京都の公家飛鳥井氏の娘を自分の養女とした上で元繁の妻と  
したが、帰国後まもなく元繁はこの妻を離別し、大内氏に公然と敵対して佐西郡に  
討ち入ったのである。永正十四年(1517)十月二十二日に有田合戦で毛利元就と  
たたか はいし いつくしま ぎす にしがた ねがえ いつくしま そうだつせん  
戦って敗死した。それから厳島の座主らの西方への寝返りや厳島の争奪戦など  
があり、神領衆の分裂抗争は次第に膠着状態に陥った。

### おおうちよしおき しんりょうちよくせつしはい 大内義興の神領直接支配

こうした じょうきょう なか えいしやう おおうちよしおき きこく よしおき したが  
こうした状況の中、永正十五年(1518)に大内義興が帰国すると、義興に従っていた  
ともたおきふじ おがたかがのかみ くにもと かえ かんぬしき ぶにん のぞ よしおき  
友田興藤、小方加賀守も国元に帰り、ともに神主職に補任されることを望み、義興  
に愁訴した。しかし義興は愁訴を退け、神主を置かず神領を自己の支配下に収め  
ることにした。これは将来の武田氏攻略への布石であった。

たけだし さいぜんせん こいじやう ないとうまごろく いしうち すいしやうじやう すぎかいかみ  
武田氏との最前線になる己斐城に内藤孫六、石内 水晶城に杉甲斐守。そして  
れきだいかんぬし きよじやう さくら おじやう しまだえつちゆうのかみ おおふじかがのかみ もうりしもつけ  
歴代神主の居城であった桜尾城に嶋田越中守を、のちに大藤加賀守、毛利下野  
のかみ じやうばん しんりょうちよくせつしはい たいせい きやうか おおうちよしおき すえおきふさ  
守を城番とした。こうして神領直接支配の体制を強化した大内義興は、陶興房を  
たいしやう たいぐん あき はけん たけだし こうせい かいし  
大将とする大軍を安芸に派遣し武田氏への攻勢を開始した。  
たいえい さとうふじまる げんざいちふしやう ほんじん お かっせん およ たけだがた ぼう  
大永二年三月佐藤藤丸(現在地不詳)に本陣を置き、合戦に及んだが武田方の防  
えいせん とつぱ すえおきふさ きこく  
衛線は突破できず、八月になり陶興房は帰国した。

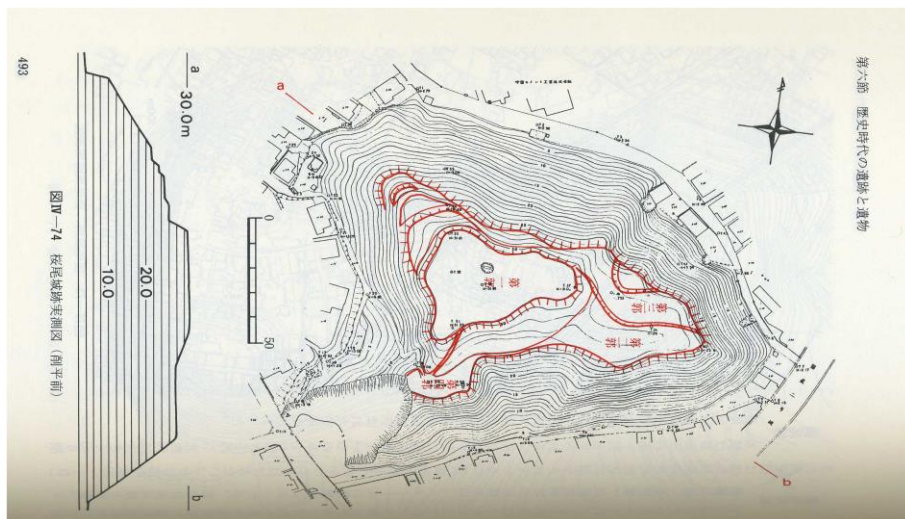
### ともたおきふじ きよへい 友田興藤の挙兵

きやうと な おきちか いとこ おきふじ おおうちよしあきじやうらくちゆう すえたかふさ  
京都で亡くなった興親と従兄弟であった興藤は、大内義興上洛中に陶隆房ととも  
れんがかい こうぎやう おおうちし かんけい ふか じた みと かんぬしきけいしやう  
に連歌会を興行するなど、大内氏との関係も深く、自他ともに認める神主職継承の  
ゆうりよくこうほ おも さき よしおき さいてい おお ふまん  
有力候補であると思っただけに、先の義興の裁定には大いに不満があった。  
さらに しんりょうしゅう おおうちし しんりょうちよくせつしはい はんぱつ つよ しんりょうしゅう  
の多くが興藤の挙兵を支持した。一方、このような興藤、神領衆の動きは、大内氏  
がわ じぜん さつち だいえい うらう さくら おじやう ぼうび かた  
側でも事前に察知しており、大永三年(1523)閏三月ごろ、桜尾城の防備を固める  
ながさき やはちろう とじやう めい ともたおきふじ おおうち  
ために、長崎弥八郎にも登城を命じた。ついに同年四月十一日、友田興藤は大内  
し はんき さくらおじやうばん おおふじかがのかみ こいじやうばん ないとうまごろく ついぼう  
氏に反旗をひるがえし、桜尾城番の大藤加賀守、己斐城番の内藤孫六は追放され  
すいしやうじやう すぎかいかみ はつかいちゆうしるこうじ こうみやうじまえ とお たけだがた う  
水晶城の杉甲斐守は、廿日市後小路(光明寺前の通り)にて武田方に討たれた。

こうして武田光和らの後援を得て桜尾城へ入り、友田興藤は自ら神主と称した。  
 大永三年(1523)六月、安芸に侵入した出雲の尼子経久は、毛利・吉川氏などを従  
 えて大内氏の拠点鏡山城を攻略する。大内氏の反撃は同年八月ごろより開始され  
 る。八月一日弘中武長の警固衆が周防遠崎(現在柳井市)を出帆、同じころ陶興房  
 も陸路安芸に向けて出発し、八月五日土毛田(かつての佐伯町友田)で興藤方と戦  
 い、大野の門山に本陣を置いた。警固船は八月十八日に厳島に押し寄せ、興藤  
 方の番衆を追放し島を占領、九月十七日には廿日市、能美、江田島へも押し寄せ、  
 十月三日には厳島へ来襲した興藤方の警固船を撃退し、十一月一日には厳島か  
 ら五日市を襲って放火している。  
 一方、陸上では大内方の石道の小幡氏が武田勢に攻められ、城を開いて三宅(五日  
 市)の円明寺において切腹。両軍膠着状態のまま年が明け、大永四年(1524)五月  
 戦況は一変する。大内義興、義隆父子が安芸に出陣して厳島の勝山に本陣を置き、  
 陶興房は岩戸山に、吉見・杉・内藤氏らは天神山篠尾に陣を置いて桜尾城を包囲  
 し、弘中武長の警固船が海上を封鎖したため、桜尾城は完全に孤立状態になった。

さくらおじょう じつそくず  
 桜尾城の実測図

「廿日市町史通史編(上)」より引用





さくら おじょう こうぼうせん  
桜尾城の攻防戦

さくらおじょう と かこ おおうちぜい さくら おじょう こうげき おおうちがた さいとう  
桜尾城を取り囲んでいた大内勢は、七月三日 桜尾城に攻撃をかけ大内方の齊藤  
たかし やきず お いつくしま かつやまじょう おおうちよしおき ひ とかい さくら おじょう  
高利は矢疵を負った。厳島の勝山城にいた大内義興は、日々渡海して桜尾城の  
せんきょう み おおうちがた さくらおじょうこうげき ほんかくてき かいし  
戦況を見ていた。大内方による桜尾城攻撃が本格的に開始されるのは七月二十

四日のことである。陶勢が二の丸まで攻めながら十人ばかり討ち死にして撤退。  
よく に ほ きためんこぐちみずので こうげき じょうない いとがへいざえもんじょう おおうち  
翌二十五日仁保らが北面虎口水之手を攻撃。城内の糸賀平左衛門慰は、大内  
がた かつやし のぼりこぐち ほり う と こぐち ぼうぎょ かた しる でいぐち  
方の勝屋氏を登小口の堀で討ち取っている。虎口は防御を固めた城の出入り口、  
みずのて じょうない ようすい のぼこぐち のぼ ざか しる いりぐち  
水之手は城内の用水のこと。登小口は登り坂の城への入口。

二十九日城内の用水を絶つ目的で城の北側にあった井戸を守る廓(囲い)を再び  
こうげき  
攻撃している。

ほり けんこ でいぐち さくらおじょうない とつにゆう はば じょうない ふえ たいこ はや  
堀や堅固な出入り口で桜尾城内への突入を阻み、城内から笛や太鼓で囃したてて、  
や つぶて な こいし はんげき おきふじがた せ おおうちがた こうわ なか  
矢や礫(投げつける小石)で反撃する興藤方に、攻めあぐねた大内方は講和の仲  
かい よしみよりおき いらい おきふじ たけだし あまごし きゅうえん のぞ  
介を吉見頼興に依頼する。興藤としても、武田氏や尼子氏の救援が望めないまま、  
ろうじょう しる てき ふせ つづ げんかい おおうちがた こうわ おう  
籠城(城にたてこもって敵を防ぐこと。)を続けるには限界があるため、講和に応じる

ことになる。講和の条件は興藤が神主の地位から退くかわりに、興藤の兄の子・  
とうたろう かんぬし おおうちよしおき しょうにん おもわく いっち りょう  
藤太郎を神主とすることを大内義興が承認することであった。思惑の一致した両  
しゃ とうたろう いつくしま わた おおうちよしおき たいめん こうわ せいしき  
者は、十月十日藤太郎が厳島に渡り、大内義興に対面したことで、講和は正式に  
せいりつ せいらつ ごかんぬしとうたろう かねふじ びょうし おきふじ おとうしろう かもんのかみひろ  
成立した。その後神主藤太郎(兼藤)は病死したため、興藤の第四郎を掃部頭広  
なり なの かんぬし きょうろく おおうちよしおき やまい やまぐち きこく  
就と名乗らせて神主とし、享禄元年(1528)大内義興が病のため山口へ帰国する  
ちよげん ひろなり よしおき たいめん やまぐち きこくごよしこう  
直前の八月二十日広就は義興と対面した。山口へ帰国後義興は十二月二十日

に死去し、義隆がその跡を継いだ。

おおうちよしたか きたきゅうしゅう しょうに おおともし たいけつ つづ あいだ おおうちし  
大内義隆は北九州における少弐・大友氏との対決が続き、しばらくの間、大内氏  
あ きけいりやく(しほう てきち へいてい てんか おさ  
の安芸経略(四方の敵地を平定し、天下を治めること。)は見られなくなった。

おおうちよしおきしご ともだおきふじ しんりょう じつけん にぎ おも おさ  
大内義興死後、友田興藤は神領の実権を握り、思うがまま治めていた。

すえおきふさ だいが あいさつ さんじょう ししや さくらおじょう ひろなり おく きょうろく  
陶興房は代替わりの挨拶に参上するよう使者を桜尾城の広就に送り、享禄三年  
ひろなり いつくしま やまぐち げこう よしたか たいめん  
(1530)十二月十三日広就は、厳島より山口に下向して義隆に対面し、二十八日に  
さくらおじょう かえ  
桜尾城に帰った。

てんぶん あきかねやまじょう たけだみつかず びょうし あきただしだんぜつ  
天文九年(1540)六月九日安芸金山城で武田光和は病死し、安芸武田氏断絶。

あき もりもととなり いずも あまごし じゅうぞく てんぶん  
安芸の毛利元就は、はじめ出雲の尼子氏に従属していたが、天文6年(1537)

あまごけとうしゆ つねひさ いんきよ かとく まご はるひさ あきひさ ゆず じゅうぞくさき すおう  
に尼子家当主・経久が隠居、家督を孫の晴久(詮久)に譲ると、従属先を周防の

おおうち か しえん う げいびほくぶ せいりよく かくちょう  
大内氏へと替え、その支援を受けて芸備北部に勢力を拡張していった。

いきどお はるひさ てんぶん もとなり う もとなり きじょう よしだ  
これに憤った晴久は天文9年(1540)6月、元就を討つため、元就の居城・吉田

こおりやまじょうぜ き  
郡山城攻めを決める。

いずも あまごはるひさ よしだ こおりやまじょう ほうい ほう ともだおきふじ  
九月四日出雲の尼子晴久が、吉田の郡山城を包囲したとの報に、友田興藤は、

だいえい つつ ふたた おおうち し はんき てんぶん  
大永三年(1523)に続いて再び大内氏に反旗をひるがえし、天文十年(1541)一月

むらかみすいぐん けいごせん せき いつくしま せんりょう いつくしまやまんどころしどし  
十二日村上水軍の警固船二十~三十隻で厳島を占領し、厳島社政所宍戸氏が

おおうちぜい ついほう よくじついちがつじゅうさんにち よしだ みやぎきながお かつせん あまご  
大内勢を追放した。ところが、翌日一月十三日、吉田で宮崎長尾の合戦で尼子

ぐん やぶ し おきふじ おおうちぜい いつくしま ほうち へいりょう むらかみすいぐん  
軍が敗れたことを知らない興藤は、大内勢が厳島に放置した兵糧を村上水軍の

けいごせん しきゅう せんしゅうきぶん ひた くらわたかなお たいしゅう  
警固船に支給するなど戦勝気分浸っていた。しかし十五日に黒河隆尚を大将

おおちがたけいごせん せき いつくしま おそ むらかみすいぐん お ほう いつくしま  
とする大内方警固船二百~三百隻が厳島を襲い、村上水軍を追い払い厳島を

せんきょ りくじょう おおちがた こうせい かいし てんぶん  
占拠した。陸上においても大内方は攻勢を開始、天文十年(1541)三月九日、十

ふじかけ おきふじがた こうせん おおちよしたかじしん いわくに おおの かど  
九日と藤掛と興藤方と交戦、大内義隆自身も三月十八日に岩国から大野の門

やま ほんじん うつ ななお すず さくらおじょう ほうい さくせん  
山に本陣を移し、二十三日にはさらに七尾に進んで桜尾城を包囲する作戦にて

ぜんかい だいえい ろうじょうせん こと こんかい ようそう ちが  
た。前回(大永三年四月~四年五月)の籠城戦と異なり、今回は様相が違うこと

しんりょうしゅう ところ うち おきふじ みぬ  
を、また神領衆の心の内を興藤は見抜けていなかったようである。

せんらん よ つね いくさ ま し い の か いくさ  
戦乱の世の常、戦に負ければ死あるのみ。生き延びるためには、勝ち戦でなけ

ればならない。今回の情勢は興藤方に不利と判断した興藤に従属していた神領

しゅうはじん のさか くまのし おきふじ みかぎ やはん たいしゅう ちゅう  
衆羽仁、野坂、熊野氏らは、興藤を見限り、四月五日夜半(よなか)、大将への忠

ぎ をかなぐり捨て、戦わずして一斉に桜尾城を抜け出した。我一人と気づいたが

おそ おきふじ しる ひ はな せつぶく かんぬし ひろなり くりすし ともな  
すでに遅し、興藤は城に火を放ち切腹をした。神主の広就はというと栗栖氏に伴

しる む だ いつかいちじょう はい よく いつかいちじょう おおちがた ほうい  
われて城を抜け出し五日市城に入ったが、翌六日には五日市城も大内方に包囲

いっかいちじょうしゅししどやしちろう かんぬし ひろなり せつとく せつぶく おおちがた  
されたため、五日市城主宍戸弥七郎は神主の広就を説得し切腹させて、大内方

こうぶく とく てんぶん じょうきゅう ふし わらちかざね  
に降伏した。時まさに天文十年(1541)四月六日。承久三年(1221)藤原親実が

かまくら かんぬしき にん いらい かんぬしき せしゅう  
鎌倉より神主職に任ぜられて以来三百二十年にわたり神主職を世襲し

いつくしまじんじやしんりょう ささいぐん しばい ふじわらしかんぬしけ めつぼう  
厳島神社神領、佐西郡を支配してきた藤原氏神主家はついに滅亡した。

てんぶん ともたおきふじ じけつ さくらおじょう しろ しょういつ  
天文十年(1541年4月5日)友田興藤が自決するとき桜尾城に火をつけ、城は焼失  
し、藤原氏神主家滅亡後、桜尾城は大内氏の支配に入った。  
どうねん すぎきょうぶしょうたかまさ かげのり かんぬし にんめい  
同年十一月二十日杉刑部少輔隆真(影教)が神主に任命され、十二月二十三日、  
三十~四十人で厳島に行ったが、社家などの勢力が強くて、追い返されたほど  
の権力のない名ばかりの神主であった。  
かんしゅかげのり え のじま えひめけん ざいじょう  
神主影教はやむを得ず能島(愛媛県)に在城していた。  
おおうちし さくらおじょう わしずじぶしょう おお かなやまじょう やぎじょう こいじょう  
大内氏は、桜尾城に鷲頭治部少輔ほかを置き、さらに銀山城、八木城、己斐城、  
くさつじょう おい ささいぐん しはい  
草津城にも置き、佐西郡の支配に当たった。

すえたかふさき すえけ どうしゅ てんぶん はたち あまごぐん  
陶隆房が陶家の当主となったのが天文九年(1540)、二十歳のときであり、尼子軍に  
きよじょう あきこおりやまじょう せ もうりもとなり えんぐん ようせい じちようろん  
居城の安芸郡山城を攻められた毛利元就から援軍の要請があったとき、自重論が  
しはいてき ぐんぎ せき おおうち ふくぞく もうり すく めいぶん しゅちよう  
支配的な軍儀の席で、「大内に服属した毛利を救わねば名文がたちませぬ」と主張  
した隆房は自軍だけで初陣として出陣し尼子軍を追い返した。  
おおうちけ じゅしん ちい し たかふさ おおうちよしたか しんざん  
大内家の重臣の地位を占めるようになった隆房ではあったが、大内義隆が新参の  
さがらたけとう ちようよう じようきよう いっぺん おおうちけかしんない ぶんじは ぶだん  
相良武任を重用しはじめたことで、状況が一変する。大内家家臣内に文治派と武断  
は たいりつ ぶりよくとうそう はってん たかふさ おそ きがらたけとう ちく  
派の対立が生まれ、武力闘争にまで発展しかけたが、隆房を恐れた相良武任は逐  
でん (逃げて姿をかくすこと。)した。しかし固い絆に結ばれていた主従の義隆と隆房  
みぞ ふか  
の溝はますます深くなっていくばかりであった。  
てんぶん すえたかふさき しゅくんおおうちよしたか はい ようじよしたかようりつ たくら もうりもとなり  
天文十九年(1550)陶隆房は、主君大内義隆を廃し幼児義尊擁立を企み、毛利元就に  
えんじよ こ しんちよう もとなり たかふさ めい したが じりよう ふ  
援助を請うたが、慎重な元就は隆房の命に従いながらも、せつせと自領を増やしなが  
ら、その間、逆スパイや贗の手紙まで使って「陶家の有力武将江良興房が裏切っ  
ている」とでっちあげ、隆房に殺させるのに成功している。

こうして機を伺っていた元就は天文二十年(1551)八月二十日桜尾城に使者を派遣し、  
おおうちし かしん わしずじぶしょう しろ あけわた わしず やまぐち げこう  
大内氏家臣鷲頭治部少輔らに城を明渡させ、鷲頭は山口に下向した。  
さくらおじょう せつしゅう すえたかふさき えらふさきひで さくらおじょうばん しんりよう しはい ほんまる もうり  
桜尾城を接收した陶隆房は江良房栄を桜尾城番とし神領を支配させ、本丸に毛利  
よきん に まる にいざと こい はい ぼうび かた わしず ししろあけわた こ  
与三、二の丸に新里、己斐らを配し防備を固めた。鷲頭氏城明渡し十二日後の九  
月一日ついに陶隆房は、大寧寺(長門市)で主君大内義隆を討った。毛利元就は陶勢  
つわのし'ようこうげきちゆう てんぶん おおうちよしなが たかふさあらた すえはるかた だんぜつ  
の津和野城攻撃中、天文二十三年(1554)五月大内義長、隆房改め陶晴賢と断絶した。

五月十二日<sup>もうりもととなり すえがた しろうりやく</sup>毛利元就は陶方の城攻略のため、二千余騎を従え<sup>よき したが かなやまじょう やぎじょう</sup>銀山城、八木城  
 など城番に城を明渡させ、洞雲寺に入り、桜尾城に立て籠もる<sup>じょうばん しろ あけわた とおんじ さくらおじょう た こ えらし</sup>江良氏ほかに城  
 を明渡させ、また<sup>あけわた</sup>厳島を守備していた陶方の深町を島から追い出し、島を占拠した。  
<sup>こうじがねん</sup>弘治元年(1555)厳島合戦では、<sup>いつくしまかつせん さくらおじょう もうりぐん ほんじん</sup>桜尾城は毛利軍の本陣となり、陶晴賢に勝利  
 した<sup>もうりもととなり さくらおじょう がいせんしき すえはるかた くびつげん おこな</sup>毛利元就は桜尾城で凱旋式と陶晴賢の首実検を行った。  
<sup>いつくしまかつせん もうりしじゅうしんかつらもとずみ さくらおじょうしゅ えいろく</sup>厳島合戦後、毛利氏重臣桂元澄が桜尾城主となり、永禄十二年(1569) <sup>もうりもととなり</sup>毛利元就  
 の子<sup>こもうりもとときよ ひでもと つづ</sup>毛利元清、秀元と続いた。

<sup>とうじ</sup>当時<sup>たいしやう</sup>にちなんで、大正<sup>しやうわ</sup>から昭和<sup>じだい</sup>の時代に<sup>さくらおじょうし おこな</sup>桜尾城址<sup>がいせんしき</sup>で行われていた凱旋式<sup>がいせんしき</sup>のようす。



式旋凱城尾櫻町市日廿

「佐伯郡志」大正七年刊 251頁 より抜粋

<sup>てんしやう</sup>天正十五年(1587年)には九州征伐に向かう途中、あの<sup>きゆうしゅうせいばつ む とちゆう</sup>豊臣秀吉が桜尾城に着陣。  
<sup>けいちやう</sup>慶長五年(1600年)関が原の戦後、毛利氏が防長へ転封(領地の移し換え)になり、  
<sup>もうりししはい しゆうえん ともな さくらおじょう しだい こうはい</sup>毛利氏支配の終焉に伴い、桜尾城は次第に荒廃していき、空地となった居館  
<sup>かんえい つわのほん おふなやしき</sup>に寛永八年(1631年)津和野藩の御船屋敷ができた。  
<sup>やく</sup>こうして約400年続いた<sup>さくらおじょう えいこせいすい お</sup>桜尾城の栄枯盛衰は終わるのである。

<sup>ごじやうし</sup>その後城址は、大正元年(1912)桂元澄の子孫、総理大臣三回経験の桂太郎氏  
<sup>はつかいち きぞう しやうわ ころやく ひようこう さくらおじょうし</sup>が廿日市に寄贈し、昭和42年頃約30メートルの標高の桜尾城址は10メートルくらい削られ  
<sup>あじな うめたて つか かつらこうえん しみん いこ ば</sup>阿品の埋立に使われ、桂公園として市民の憩いの場となっている。  
<sup>ざんねん つわもの ゆめ おもかげ</sup>しかし残念なことに、兵どもの夢のあととは、もはや面影もなく、ただのグラウンドになり  
<sup>は</sup>果ててしまった。現在廿日市にあった城址はすべて土地整理され、その<sup>げんざいはつかいち じやうし とちせいり</sup>痕跡すら  
<sup>け さ おもかげ み あ</sup>消し去られ、まったく面影は見当たらない。